

初級中国語授業における文化的要素の導入 -異文化コミュニケーションの深化を目指して-

The Integration of Cultural Elements in Elementary Chinese Language Classes - Aiming to Deepen Intercultural Communication-

徐 璐 Xu Lu

要旨

本稿では、初級中国語授業における文化的要素導入の具体例を取り上げ、文化的内容の説明と異文化コミュニケーションの関係について検討した。2023年度の初級中国語授業では、履修者を対象に中国文化への関心調査を行い、その結果を踏まえて、漢字の歴史、食文化、人口政策、モバイル決済といったテーマを日中比較の視点から取り上げて補足説明を行った。さらに、これらのテーマに基づく会話練習を実施した結果、履修者からは文化的理解の深化に関する肯定的な反応が得られ、実践的な言語能力の向上にも寄与する可能性が示された。

キーワード：初級中国語、文化的要素、異文化コミュニケーション

Keywords: Elementary Chinese, Cultural Elements, Intercultural Communication

1. はじめに

言語と文化が密接に関連しており、語学力と文化理解が相補的な関係である。そのため、大学における中国語教育の重点は、学習者の言語知識の習得とコミュニケーション能力の向上にあるだけでなく、中国文化に関する幅広い内容の導入も求められている。このことは、すでに数多くの先行研究で指摘されており、その重要性はいうまでもない。

しかし、中国語の授業に文化的要素を組み込むことには、時間的制約や体系的に解説する難しさという現実的な課題が伴っている。確かに、第二外国語としての中国語教育では、言語知識の教授が主要な目的であり、文化的内容に対する十分な説明を確保するのは難しい。それに、中国文化には多岐にわたる要素が含まれており、限られた授業時間内で体系的に紹介することも極めて困難である。

この課題に関しては、すでに多くの教員がさまざまな試みを行い、先行研究が蓄積されている。浅野雅樹は中国の「食文化」に着目し、大学における中国語教育に文化的内容をより効果的に導入する方法を考案した²。また、馬叢慧は大学で使われている中国語のテキストに焦点を当て、文化的要素がどの程度組み込まれているかについて検討した³。さらに、

洪潔清、張宏波、藤原優美らは、マルチメディアなどの活用を通じて、授業内で中国文化を紹介する実践的な教育研究を行ってきた⁴。これらの先行研究は、文化を取り入れた中国語授業の方法について、多角的な視点から検討を行い、貴重な示唆を提供している。

しかし、文化には多様な定義があり、その内容も極めて豊富であるため、どの要素を導入すべきかは一概に決めることはできない。また、第二外国語としての初級中国語授業では、履修者の専攻、学年、素質や学習目標が異なるため、授業中に学生の学習段階や学習目標に応じた文化的内容の導入が求められる。さらに、文化要素の導入は、円滑なコミュニケーションの促進を目的とするため、単なる文化に関する説明にとどまらず、異文化コミュニケーションの視点からも会話の学習を進める必要があると考えられる。

よって、本稿では、先行研究で得られた理論を基に、福知山公立大学における初級中国語教育における文化導入の事例を取り上げ、中国文化の導入を通じて異文化コミュニケーションを深化させる取り組みについて検討する。これにより、初級中国語授業における文化教育の効果的な教授法を提案し、今後の大学における中国語教育の方向性の一端を示すことを目指す。

2. 福知山公立大学の中国語授業について

福知山公立大学には、地域経営学部、情報学部と大学院地域情報学研究科が設置されており、2024年5月現在、在籍学生数は860人に達している⁵。学部の科目は共通教育科目と専門教育科目に分かれており、外国語科目群は前者に配置されている。福知山公立大学の外国語教育は、主に英語（必修科目）、中国語（選択科目）と海外語学研修（選択科目）に分類されており、学生が在学中に第二外国語として中国語を「中国語Ⅰ」（初級・前期開講）、「中国語Ⅱ」（初級・後期開講）、「中国語Ⅲ」（中級・前期開講）、「中国語Ⅳ」（中級・後期開講）の順で履修することとなっている。

筆者はこれまで、初級中国語授業の「中国語Ⅰ」と「中国語Ⅱ」を担当しており、いずれも初心者向けの入門的な授業である。開講は前期と後期に分かれ、それぞれ15回の授業が行われる（16回目は定期試験である）。第二外国語の中国語授業は週に1回、90分の授業時間で実施されるので、一学期の授業時間は22.5時間、年間では45時間となる。履修者は1クラスあたり約40名であり、1年間の学習を通じて漢語水平考試（HSK試験）の2級または3級の資格取得を目指す。

使用しているテキストは、『中国語GO』という大学独自に開発されたものであり、日本の大学生が中国へ留学する時に必要とされる基礎的な会話内容を中心に構成されている。「中国語Ⅰ」は、中国語学習の入門基礎講義として、主に2つの段階に分けて進めることになる。前半において、ピンインの構成、母音、子音、声調など発音に関する基礎的要素を学習し、後半において「自己紹介」、「図書館で本を借りる」、「学食で食事する」、「大学での授業」といった日常的な主題をめぐって、中国語の基本的な文法構成、語彙、日常会話などを学習することで、中国語の基本文法の構造を把握することを目指す。「中国語Ⅱ」では、前期の「中国語Ⅰ」の内容を踏まえて、「趣味」、「家を訪問する」、「バイトする」、「期末試験」という主題に基づき、日常生活に頻繁に使われる中国語の文法・語彙を学び、より複雑な会話ができるようになることを目指す。

この授業は、全学共通の第二外国語科目として、基礎的な中国語の教授とともに、学生のコミュニケーション能力の向上を目的としている。そのため、テキストの内容は基礎的な会話学習に特化しており、中国の伝統文化に関する内容はほとんど含まれていない。また、授業では言語知識の教授が主な目的となるため、文化的な要素を取り入れるための十分な時間を確保することは難しい。

3.中国語教育に必要とされる文化要素と導入方法について

無論、大学における中国語教育は、主に外国語教育として位置付けられて、ピンイン、語彙、文法といった言語運用能力の向上が主要な任務とされている。しかし、より円滑に中国語を駆使してコミュニケーションするためには、言語知識に加えて、付随する文化的内容の学習も必要である。

さて、語学教育、とりわけ中国語教育に不可欠とされる文化的要素には、具体的にどんな内容が含まれているのであろうか。この問題について、張占一は、語学教育に関連する中国文化について教育の機能の観点から「知識文化」と「交際文化（コミュニケーション文化）」の二つに大別できると述べている⁶。端的に言えば、「知識文化」とは、芸術、宗教、歴史、地理、思想など、異なる文化的背景を持つ人々がコミュニケーションを取る際に、情報が正確に伝達されるのに直接影響を与えない文化的要素のことであり、一方で「交際文化」（または「コミュニケーション文化」）は、中国人の価値観、習慣、心理、思考方法など、異文化交流に直接影響を及ぼす文化的要素のことを指している。

では、「知識文化」と「交際文化（コミュニケーション文化）」は、いかに効率的に教育現場に導入すべきであろう。この課題について、浅野雅樹は実践面における三つの方針を提示しており、第一に「多くは教えない」、第二に「できるだけ教える」、第三に「文化を兼ね合わせた語学教育」を実施することである⁷。浅野は、前者の二つの方針に対してさまざまな障壁が存在するため、実際の教育現場での実現には限界があるとし、「文化を兼ね合わせた語学教育」を基本理念として、「言語要素の指導を中心としながらも、必要な『コミュニケーション文化』を取り入れることが現実的だ」⁸と主張している。

筆者は、その方針に基本的に賛同しており、これまでの授業の中で限られた時間を有効に活用しながら、「文化を兼ね合わせた語学教育」の実践に努めてきた。例えば、「中国語Ⅰ」の授業では数字の読み方を教える際、発音練習に加えて、中国語と日本語の数字に見られる文化的要素を取り上げ（日本人は奇数を好む一方で、中国人は偶数を好む傾向がある）、数字にまつわる吉凶の違いについて補足してきた。

しかし、第二外国語としての中国語授業、とりわけ基礎的な言語スキルの習得が最優先される初級中国語授業では、文化的内容の説明が過剰になると学生の負担になりかねない。また、試験合格を目指す学生は、中国の芸術や思想、宗教といった深遠な内容よりも、日常生活に関わる日中文化の違いに関心を持つ傾向がある。したがって、文化的内容の取捨選択とその提示方法には十分な配慮が求められる。

4.学生が中国に対する認識と関心についての調査

上記の課題を解決するために、学生が興味を持つ文化的要素を活かしつつ、興味が薄い分野への関心を広げることが重要だと考えている。そこで筆者は、2023年度の初級中国語授業のA・Bクラス71名を対象に、中国に対する認識と関心について調査を実施し、計66枚の有効回答を得た。

調査方法としては、履修者に中国の社会や文化について関心のある要素を、5つのキーワードとして自由に記述してもらった。その後、調査の回答を基に、キーワードの頻度を集計し、上位キーワードを抽出して分類した。結果として、以下のような順位が得られた。

第一位は中華料理（69回）、具体的には北京ダック、小籠包、上海ガニなどが挙げられた。第二位は人口問題（48回）。具体的には一人っ子政策、人口が多いなどが含まれた。第三位は漢字の異同（43回）。第四位は中国の歴史（32回）、具

体的には始皇帝、三国志、科挙などが挙げられた。第五位は世界遺産（25回）、具体的な項目として万里の長城、紫禁城などが含まれた。

調査の結果から見れば、履修者は中華料理や漢字といった身近な要素、人口問題といった中国社会の特徴や課題、さらに中国の歴史や文化的背景に強い関心を持っていることが明らかとなった。一方で、現代中国の技術や企業（例えば、ファーウェイ、ティックトック、アリババ、ドローン技術）に対する関心は低くて、それぞれの項目が一回ずつしか言及されなかった。

この調査結果を踏まえ、履修者がすでに強い関心を持つ分野をさらに掘り続けながら、現代中国の技術革新や生活パターンにも関心を広げられるよう工夫すべきである。これにより、学生は現代中国とその歴史的背景を結びつけて学ぶことができ、国際的な視野を広げるとともに、将来のキャリア形成や人生観に対しても好影響を与えることが期待される。

5.文化要素導入の実践例について

授業時間の制限によって、文化的要素を網羅的に取り入れることは難しい。そのため、テキストの内容との関連性を重視し、漢字の歴史、食文化、人口政策、モバイル決済といったテーマを選定して日中比較の視点から紹介することを試みた。

前述のように、初級中国語授業で利用されるテキストは、大学独自に編纂されたものであり、「中国語Ⅰ」と「中国語Ⅱ」において、「自己紹介」、「図書館で本を借りる」、「学食で食事する」、「大学での授業」、「趣味」、「家を訪問する」、「バイトする」、「試験」といった会話のテーマが取り上げられている。また、このテキストは、主に言語知識に重点を置いているため、筆者は授業中に文化的な要素を補足的に説明し、さらにその内容に基づいた実践練習を行う形で進めた。以下に、その具体的な実践例を示す。

5.1 漢字の変容

これまでの授業を通じて、初級中国語の履修者は、ほとんどが初心者であるため中国の漢字に強い関心を示している一方で、その変化や日中漢字の違いについて詳しく知らないことが明らかになった。そのため、繁体字と簡体字の違いおよびその歴史的背景に関する知識は、履修者の語彙学習において重要な基盤を形成すると考え、言語文化の視点から漢字の変容に関する説明を行った。以下に、具体的な実践例を示す。

例1：

項目	内容
テーマ	漢字の変容について
導入のタイミング	ピンインの説明を終えた後、第一課「自己紹介」に入る前に、漢字の変容（繁体字から簡体字へ）について説明を行う。
到達目標	1. 繁体字と簡体字の違いを理解し、その背景にある歴史的、文化的要因を把握する。 2. 簡体字への変容の過程とその意義を理解し、日本の漢字改革との違いを理解する。 3. 繁体字と簡体字の具体的な例を認識し、実際の文脈で使い分けができる。

教師の解説	1. 繁体字と簡体字の基本的な特徴 繁体字：中国では古来より使用されてきた伝統的な文字で、筆画が多い。現在、台湾、香港、マカオなどの地域で使用されている。 簡体字：繁体字から簡略化されたもので、筆画が少なく読み書きが容易。中国大陆を中心に広く使用されている。 2. 歴史的変容 20 世紀中頃、中国政府は識字率向上と教育普及を目的として簡体字の導入を決定。1956 年に最初の簡体字一覧を発表し、1964 年に正式採用された。 3. 日本の漢字改革と比較する。 1946 年に「当用漢字表」が発表され、漢字の簡略化と漢字数の制限が行われた。
具体例	例：繁体字「國」（国）→ 簡体字「国」 繁体字「中」（中）→ 簡体字「中」（変化なし）
実践練習	1、繁体字、簡体字と日本語の当用漢字との比較 例：「氣」→「气」→「気」 2、履修者の苗字を例にした漢字の変換練習 例：鈴木→铃木、高橋→高桥 3、授業後、身の回りにある繁体字と簡体字の例を探し、次回の授業で共有する。

これらの説明と実践練習に対して、履修者からは「面白かった」、「よく理解できた」、「自分の名前の中国語の漢字を知れて興味深かった」といった肯定的なフィードバックが寄せられた。このような説明は履修者の興味を引きつけるだけでなく、中国語への理解を深める助けにもなった。また、自分の氏名を中国語の簡体字に変換する実践活動を通じて、履修者は漢字の変容をより具体的に実感できた。この経験は学習意欲の向上にも寄与し、授業の効果を高める結果となったと考えられる。

5.2 中華料理と中国料理

前述の調査結果により、履修者を対象に実施した調査の結果、中国の食文化、特に中華料理に対する関心が非常に高いことが明らかになった。というのも、履修者の多くは、王将などの中華料理店によく訪れたり、中華料理店でアルバイトをしたりしているからである。しかし、興味を持つ一方で、中華料理と中国料理の違いについて理解が不十分であることも判明したので、以下のように中華料理と中国料理の違いについて説明し、その後、料理注文に関する会話練習を行った。

例 2：

項目	内容
テーマ	中華料理と中国料理の違いについて
導入のタイミング	テキストの第三課「学食で食事する」において料理の話題が登場した際、中国の食文化について補足説明を行う。
到達目標	1. 文化的背景や食文化に触れることで興味を引き出す。 2. 中華料理と中国料理の違いを理解する。 3. 関連する語彙を学び、コミュニケーションの向上を目指す。
教師の解説	1. 話題導入： 「中華料理と言えば何を思い浮かべますか?」、「中国料理と聞いてどんなイメージがありますか?」というように質問を投げかけてディスカッションを促す。 2. 内容説明： 中華料理と中国料理の違い、およびお店の雰囲気の違いについて説明する。 中国料理：中国本土で発展した伝統的な料理で、地域ごとに多様性がある。 （例：四川料理、広東料理、北京料理など） 店内は本格的で、中国の伝統的な装飾が施されていることが多い。 店員は中国語を話す場合が多く、メニューには中国語が記載されている場合もある。支払いは現地通貨（人民元）が使用できる場合が多い。 中華料理：日本人向けにアレンジされた中国料理や、その発想をもとに再創作された料理である。（例：チャーハン、焼き餃子など）。

	<p>店内は日本人の食文化に合わせたカジュアルな雰囲気が主流。 店員は日本語で接客し、メニューは日本語表記が中心。 支払いは日本円で行われる。</p> <p>3. 視覚的支援：実際の中国料理店と中華料理店の写真や動画を見せ、視覚的に比較して直感的な印象を得る。</p>
関連語彙の 説明	<p>中華料理：炒飯（チャーハン）、天津飯（天津飯）、干焼虾仁（エビチリ） 中国料理：北京烤鸭（北京ダック）、火鍋（火鍋）、麻辣燙（マーラータン） それぞれの料理について、調理方法や特徴も簡単に説明する。</p>
実践練習	<p>1. 我喜欢吃火锅（私は火鍋が好きです）。 2. 我要一份麻辣燙（マーラータンを一つください）。</p>

これらの説明と練習に対して、履修者からは「中華料理と中国料理は同じだと思っていたので、違いを学べて新鮮でした」、「中国料理店の本格的な雰囲気やメニューに中国語がある点などを知り、実際に行ってみたいと思いました」、「料理の写真や動画を見ながら説明を聞いたので、視覚的にもわかりやすく、授業が楽しかったです」といったフィードバックが寄せられた。これらのフィードバックから、履修者が中国の食文化や日中の文化的な違いについてより深く理解できたことが伺える。また、多文化的な視点を持ちながら、実践的な言語能力を身につける機会を提供できたと考えられる。このような文化的要素を取り入れた授業実践は、履修者の学習意欲を高めるだけでなく、異文化理解を促進する上で有効であることが示されている。

5.3 中国の人口政策

中国の人口政策は、現代中国社会を理解する上で欠かせない重要なテーマであり、中国の経済発展や社会構造に大きな影響を与えてきた。前述の調査によれば、履修者は中国の人口問題に強い関心を持っていることがわかった。しかし、近年の社会発展に伴い、人口政策にも調整が行われている。その変遷は現代中国の社会構造や経済動向を理解するための重要な手がかりとなっているので、授業では中国の人口政策の歴史的背景と変遷を説明し、日本の人口政策との比較を行った。

例 3：

項目	内容
テーマ	中国の人口政策について
導入のタイミング	テキストの第六課「家を訪問する」で、家族や人口に関連する語彙や表現を学習した後導入する。
到達目標	<p>1. 中国の人口政策の歴史的背景と変遷を理解する。 2. 日本の人口政策と比較し、異なる文化的・社会的アプローチへの理解を深める。 3. 家庭や人口政策に関連する基礎語彙を習得し、簡単な会話で家庭構成について話せるようになる。</p>

教師の解説	<p>1. 中国の人口政策の概要への説明 一人っ子政策（1979 年）：急速な人口増加への対処と経済発展の促進を目的に、夫婦に子ども 1 人のみを推奨する政策が実施された。違反者には罰金を科した。その結果、出生率は低下したが、高齢化問題が漸次顕在化した。 二人っ子政策（2016 年）：高齢化の進行と労働力人口の減少への対応策として導入された。しかし、出生率の改善はわずかだった。 三人っ子政策（2021 年）：出生率のさらなる低下を受けて導入された。しかし、育児・教育費用の高さや経済発展の減速により、若年層の結婚・出産意欲は引き続き低下している。</p> <p>2. テキストの会話の内容に対する解説 1979 年～2016 年に生まれた中国人はたいてい一人っ子なので、家族を紹介する時に言う「哥哥」（お兄さん）と「姐姐」（お姉さん）は実の兄妹ではなく、主に従兄弟や従姉妹を指している。</p> <p>3. 日本との比較 日本における少子化対策（育児支援政策、出産奨励金、移民政策など）と、中国の人口政策を比較し、それぞれの文化的・社会的背景を説明する</p>
関連語彙の説明	<p>「独生子女」（一人っ子） 「二胎政策」（二人っ子政策） 「亲哥」（実の兄）、「亲姐」（実の姉） 「三口之家」（三人家族）</p>
実践練習	<p>A: 你家有几口人？（あなたの家は何人家族ですか？） B: 我家有四口人。（4 人家族です。） A: 你有兄弟姐妹吗？（あなたには兄弟姉妹がいますか？） B: 没有，我是独生子女。（いません。私は一人っ子です。）</p>

これらの説明と実践練習に対して、履修者からは、「一人っ子政策が中国で長い間実施されていたことを初めて知り、その背景や影響について考えるのが面白かったです」、「中国の家族構成が政策によって大きく影響を受けていることを知り、日本との違いがよく分かりました」や「実際に中国の家族構成や人口政策に触れることで、教科書の内容だけでは学べないことがわかりました」とのフィードバックが寄せられた。これらのフィードバックから、履修者が中国の人口政策やその背景に対する理解を深めたことが伺える。また、日本との比較を通じて異文化への理解を深め、実践的な中国語運用能力を向上させる契機となったことが示される。

5.4 現代中国のモバイル決済

第六課の「微信」という単語を説明した際、そのアイコンを学生に示すと、多くの学生が日本の店舗レジでよく見かけるものだとして認識していたものの、具体的な意味や背景については理解が不足していることがわかった。近年、中国からの観光客増加や日本人の訪中が進む中で、モバイル決済に関する知識を提供することは、実用的かつ文化的理解の促進につながると考えられる。そこで、授業では日本の電子マネーと比較しつつ、中国におけるキャッシュレス化の進展について説明し、実際の買い物シチュエーションを想定した会話練習を行った。

例 5：

項目	内容
テーマ	現代中国のモバイル決済について
導入のタイミング	テキストの第六課「バイトする」で登場する「微信（WeChat）」に関連して、モバイル決済の説明を追加する。
到達目標	<p>1 現代中国の生活と支払い方法の変遷の概要について理解する。</p> <p>2 日本の電子マネーと比較し、両国のキャッシュレス化の進展の違いを理解する。</p> <p>3 モバイル決済に関連する基本的な語彙を習得し、実際の買い物の場面での簡単な会話を把握する。</p>

教師の解説	<p>1. 現代中国の生活と支払い方法の変遷の概要 2000 年代初頭までは現金が主流であったが、現在では QR コード決済を中心としたキャッシュレス化が急速に進展している。 WeChat Pay (2011 年) や Alipay (2004 年) の普及により、公共料金や交通費など、ほぼ全ての支払いがスマートフォン一つで完結可能となった。</p> <p>2. 日本との比較 日本では QR コード決済 (LINE Pay、PayPay など) が普及しているものの、現金文化が根強く、中国に比べキャッシュレス化の進展は遅れている。交通系 IC カード (Suica や PASMO) など、異なるキャッシュレス手段も存在している。</p> <p>3. WeChat Pay と Alipay の海外進出 中国からの観光客向けに、日本を含む海外でも WeChat Pay や Alipay が利用可能な店舗が増加している。百貨店やレストランのレジにこれらの決済アイコンが表示され、スムーズな支払いを実現できる。</p>
関連語彙の説明	<p>微信 (Wechat pay) 支付宝 (Alipay) 二维码 (QR コード) 扫码支付 (QR コードをスキャンして支払う)</p>
実践練習	<p>A: 您用什么支付? (支払いはどうなさいますか?) B: 我用支付宝付款。(Alipay で支払います。) A: 好的, 请扫一下二维码。(わかりました、QR コードをスキャンしてください。) B: 支付完了, 谢谢! (支払いは完了しました。ありがとうございます。)</p>

この説明に対して、「電子マネーの使い方や支払い方法を知ることができたので、もし中国に行ったら役に立ちそうだと思います」、「支払い時の会話表現を学んだことで、実際にお店で使えそうな気がします」、「シンプルなフレーズでも、実際の場面で役立つと感じました」という履修者のフィードバックが寄せられた。これらのフィードバックから、モバイル決済に関する内容が学生の現代中国に対する関心を喚起し、異文化理解を深めると同時に、実践的なコミュニケーション能力の向上に寄与したことが伺える。こうしたテーマの導入は、学生に現代中国社会の具体的な一面を理解させる効果的な方法であると考えられる。

6. まとめ

本稿では、福知山公立大学における初級中国語教育の実践事例を通じて、文化的内容の説明と異文化コミュニケーションの関係について検討した。大学での中国語教育は、言語運用力の向上を主たる目的としつつも、文化的理解が円滑なコミュニケーションの鍵を握ることを再確認した。

大学における中国語教育は、主に言語運用力の向上を目的としているが、円滑なコミュニケーションを図るためには、言語知識に加え、それに関連する文化的理解が不可欠である。筆者は、2023 年度の初級中国語授業で、履修者を対象に中国に対する認識や関心を調査し、テキスト内容との関連性を重視しながら、漢字の歴史、食文化、人口政策、モバイル決済といったテーマを日中比較の視点から取り上げた。その上で、これらのテーマに基づいた会話練習を実施し、文化理解と実践的な言語能力の向上を目指した。その結果、履修者からは文化的理解が深まったという肯定的なフィードバックが得られ、実践的な言語運用能力の向上が期待できることが示された。

しかし、中国社会と文化は、社会の発展に伴い急速に変化しており、これに伴って学生の文化的要素に対する関心や理解も変容していくと考えられる。そのため、教育現場においては、学生の興味関心や社会情勢の変化を踏まえ、取り上げる文化的内容やその導入方法を柔軟に調整し続ける必要がある。本稿では、いくつかの事例に限って取り上げたが、これらの事例が、上述した課題に対応する教育実践や今後の研究に寄与する一助となれば幸いである。

《参考文献》

- (1)岩間一弘編, 中国料理と近現代日本: 食と嗜好の文化交流史, 慶應義塾大学出版会(2019).
- (2)張占一, 試議交際文化 and 知識文化, 『語言教学与研究』Vol.3, pp.15-32(1990).
- (3)喬俠, 国内近三十年対外漢語教学關於文化導入研究述評, 『考試週刊』Vol.47, pp.215-217(2009).
- (4)小川快之, 中国教育における中国文化紹介の試み, 『言語文化論叢』Vol.3, pp.105-110(2009).
- (5)洪潔清・張宏波, 中国語学習における文化紹介強化の試みー動画映像の作成とその活用, 明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 Vol.2016, pp.34-39(2017).
- (6)馬叢慧, 大学における中国語教育に見る文化的要素の考察-日本で作成された初級・初中級テキストを中心に-, 『日中言語文化』Vol.13, pp.11-24(2020).
- (7)藤原優美, 初級中国語教育における文化導入の実践について, 広島市立大学教育基盤センター紀要 Vol.1, pp.37-47(2024).

《注》

- (1)喬俠「国内近三十年対外漢語教学關於文化導入研究述評」『考試週刊』第47期、2009年、215-217頁、小川快之「中国教育における中国文化紹介の試み」『言語文化論叢』第3号、2009年、105-110頁。
- (2)浅野雅樹「中国語教育と中国の『食文化』に関する考察-中国語テキストにおける事例を中心に-」(岩間一弘編『中国料理と近現代日本: 食と嗜好の文化交流史』慶應義塾大学出版会、2019年、265-281頁)。
- (3)馬叢慧「大学における中国語教育に見る文化的要素の考察-日本で作成された初級・初中級テキストを中心に-」『日中言語文化』第13号、2020年、11-24頁。
- (4)洪潔清・張宏波「中国語学習における文化紹介強化の試みー動画映像の作成とその活用」『明治学院大学教養教育センター附属研究所年報』2016巻、2017年、34-39頁、藤原優美「初級中国語教育における文化導入の実践について」『広島市立大学教育基盤センター紀要』第1号、2024年、37-47頁。
- (5) https://www.fukuchiyama.ac.jp/about/educational_info/number_student/、2024年12月25日参照。
- (6)張占一「試議交際文化 and 知識文化」『語言教学与研究』第3期、1990年、15-32頁。
- (7)浅野雅樹「中国語教育と中国の『食文化』に関する考察-中国語テキストにおける事例を中心に-」。
- (8)浅野雅樹「中国語教育と中国の『食文化』に関する考察-中国語テキストにおける事例を中心に-」。